

炎 芸術

ほのお

見て・買って・作って・陶芸を楽しむ

秋号

2007

No.91

阿部出版



[特集]

艶なる青磁

中島宏/川瀬忍/浦口雅行/高垣篤/志賀暁吉ほか

[注目の作家] 韓国陶芸界のリーダー・申相浩

[陶芸を見る] 濱田窯三代 庄司・晋作・友緒展

[陶芸を買う] この器で楽しもう「豆皿」

陶芸実勢価格2007年秋

[陶芸を作る] 作陶入門講座「成形篇 土練り」

作陶実践講座「茶碗を作る 志野茶碗」

[陶芸を知る] 日本の名窯紀行 福島県・会津本郷焼

近代陶芸を築いた人々 ワグネルと宮川香山

陶芸用語辞典ハンドブック





アトリエインタビュー

Shin San Ho

申相浩

「二歩先」を行く
韓国陶芸界のリーダー

この10年ほどの韓国陶芸界は、大きな躍進を遂げている。

その牽引車となっているのが申相浩氏である。

韓国はもとより日本やアメリカでも何度も個展を開催し、

小誌でもたびたびその活動を報じている。

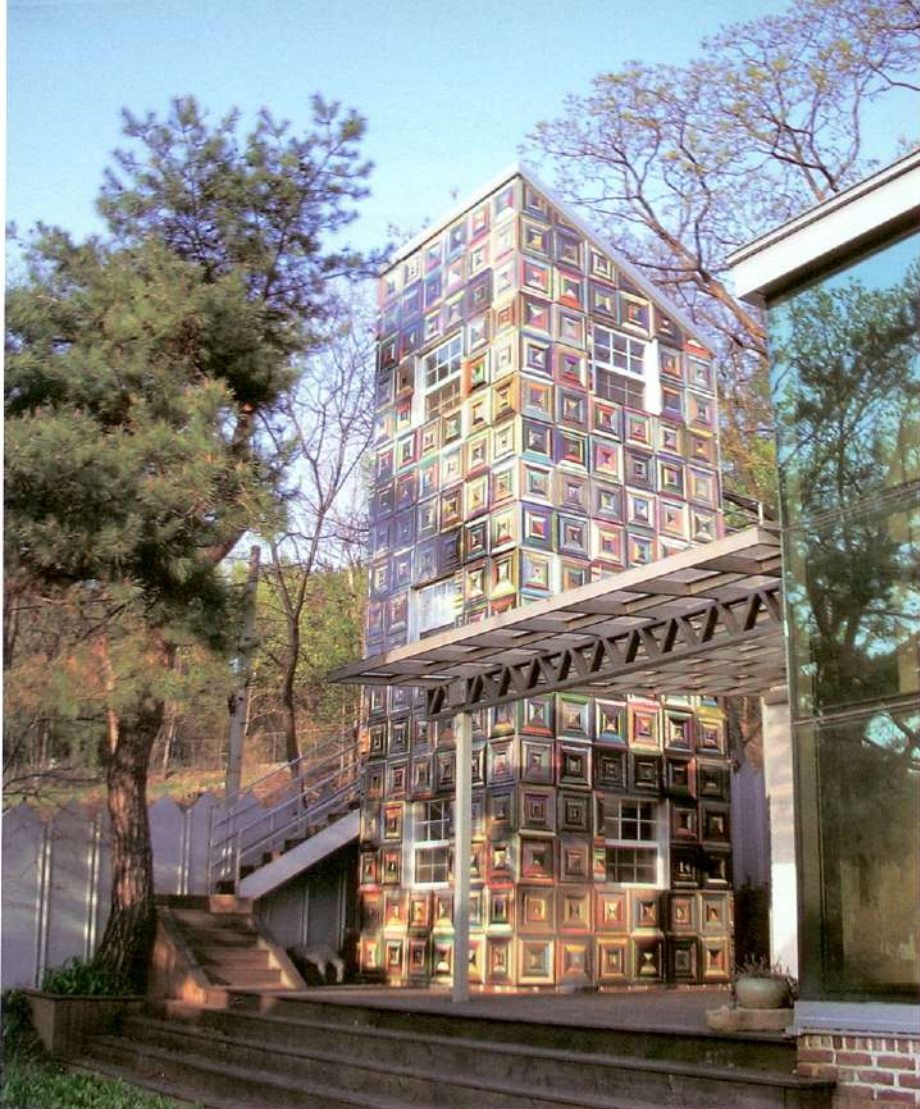
そして、その発表の度に大きく変貌し、

全く新しい仕事を見せている。

申相浩40年の陶芸の展開は、「現代陶芸」の

ひとつの道を指し示しているようだ。

ATELIER
INTERVIEW



ギャラリー棟やアトリエの壁面には、新作の陶画(ファイアド・ペインティング)が展示されている。この釜谷陶房全体は、建築的な仕事が増えてきた申氏の作品のいわば巨大な「展示場」でもある。

(左)ギメ・クレイアーク・ミュージアムのシンボルタワーの見本として敷地内の奥に建てられた「陶画の家」(2006年)。中は簡単な宿泊施設となっている。

(右ページ)自宅とアトリエがある釜谷陶房の中庭に立つ申相浩氏。

とした陶彫作品が設置されている。また、建物の壁面には、近作の《ファイアド・ペインティング(陶画)》の大作がはめ込まれている。その「陶板画」は、昨年春に釜山近くの金海市にオープンした、申氏自らが館長を務める「建築と陶芸」をテーマとするギメ・クレイアーク・ミュージアム(小誌86号で紹介)の壁面およびシンボルタワーを飾る陶板群の延長で制作されたものであるが、まさしく申氏の現在の制作意識を示す作品である。

釉薬をまるで「絵の具」のように幾重にも掛け合わせ、何度も焼



上:門を入った右側にはずらりとトータルのような「アフリカの夢」シリーズが並ぶ。
下:釜谷陶房のギャラリー棟の全景。
画面外の左奥には、「工場」のような工房が2棟建つ。

ソウル市内より北に車で約1時間の郊外・釜谷里に、韓国陶芸界を代表する陶芸家・申相浩(シン・サンホ)氏の「釜谷陶房」がある。かつてこのあたりは、周りに何もない山の中であったが、近年は開発が進み、すぐ近くまで新興住宅地が広がってきている。門柱に陶房の表札が掲げられていても、そこは日本の窯元や陶芸家のアトリエという趣ではなく、スタジオやファクトリーと言ったほうがわかりやすい。

1万坪に及ぶという広大な敷地内には、何棟ものギャラリーや倉庫、工房が建ち並び、庭のあちこちに「動物」の頭などをモチーフ



「我」シリーズ 青磁面取壺
高33.0 幅21.0cm(左) 高30.0 幅21.0cm(右) 1980-90年

(左)「我」シリーズ 白磁面取壺 高22.0 幅30.0cm 1980年

ゼロからの韓国「現代陶芸」

き上げて制作された《ファイアド・ペインティング》は、日本などで見られる従来の「陶板」とも異なつた、新たな「平面作品」の可能性を示している。陶芸においての釉薬や絵の具は、器の装飾や絵付のための材料ではあつても、それ自体を絵画的な表現の材料とするような仕事はほとんどなされていらない。

日本では大塚オーミ陶業などで、アメリカのロバート・ラウシェンバーグや日本の画家たちが陶板の大作を制作するということがあつたが、それはあくまでも「絵画」の陶板（陶芸）化ではあつても、陶板を絵画とする、つまり「陶でペインティングする」という意識で作られたものではなかつたのである。

ひるがえつてみると、申相浩氏の陶芸は、韓国陶芸界にあつて、常に「一歩先」を行く仕事であつたように思える。今、その40年を越す制作の展開をたどつてみると、申氏がなぜ「一歩先」を行く仕事を進めざるを得なかつたかが、おぼろげながら見えてくる。

申氏の陶芸家としてのスタートは、ソウルの弘益美術大学での陶磁器専攻の学生時代にさかのぼる。なんと、1965年18歳のときに、韓国の伝統的な窯業地・利川（イチョン）で自らの陶房「申相浩陶芸研究所」を設立している。そこで、独学で高麗青磁や朝鮮白磁や粉青沙器（ふんせいさき）などの技法を研究しているのである。

陶家の出身でもない青年が、およそ40年前の韓国で「陶芸」を始めるといふことが、どれほど困難なことか、日本から見れば想像もできないことであつた。

偶然にも、利川で開かれている第4回世界陶磁ビエンナーレでのセラミック・フォーラムで、岐阜県現代陶芸美術館の高満津子氏が「韓国・台湾・日本の現代陶芸」と題した講演を行い、それを聞いて、はたと納得したことがある。

1953年に朝鮮戦争が事実上終結し、その後に韓国の芸術文化の復興が始まつた。陶芸（工芸）関係では、1955年にロックフェ



「夢」シリーズ 粉青沙器壺
高48.0 幅30.0cm(左) 高47.0 幅30.0cm(右) 1992年

「我」シリーズ 黒陶壺 高50.0 幅35.0cm 1986年



ラー財団の支援により「韓国造形文化研究所」が設立され、56年には「韓国手工芸示範所」がソウルに設立されている。

特に後者では、陶磁器部門でオハイオ州立大学教授のフェイス・ティックが招かれて指導に当たり、その助手として元大正（西洋画出身）、権純亨（グラフィックデザイン出身）、金英淑（現・金益寧、化学専攻）が務め、後にそれぞれが弘益大学、ソウル大学、国民大学で陶芸教育に携わり、ここから韓国の現代陶芸が始まることになる。（高氏講演レジュメより）

では、それ以前の韓国の伝統陶芸はどうであったか、ということになると、日本の植民地時代にさかのぼる。

戦前の日本の官展である「帝展（帝国美術院展覧会）」には、27（昭和2）年に第4部工芸が新設されたが、その帝展の傘下にあった「朝鮮美術展覧会」（1922〜44）にも32年に工芸部が設けられている。

つまり、当時の朝鮮の美術（陶芸）界では、東京美術学校に留学し、朝鮮美術展を舞台に活動するか、地方窯で高麗青磁や朝鮮白磁の再現を目指して作陶する以外にはないが、そうして作られた陶芸品の受け入れ先は当然「日本」であったということ忘れてはならないのである。

日本においては、古来より中国陶磁や高麗茶碗などの朝鮮陶磁の「写し」とは、決して複製品を作ることではなく、それらを「本歌」とした日本的な創作という意味合いが強い。しかし、朝鮮の陶芸家からすれば、日本向けの朝鮮古陶磁のコピーを作っているという意識はどこに残っていたはずである。

しかし、朝鮮戦争後に陶芸を始めた申氏は、最初から古陶磁のコピーを作るのではなく、古陶磁の技術を元にした「現代陶芸」を作ろうとしていた。

白磁・青磁・粉青沙器から現代陶芸へ

申氏の初期の作品がどういうものだったかはよくわからないが、



「ヘッド」シリーズ・ハイアット・プロジェクト
高55.0 幅70.0cm 1994年
このシリーズの何点かが
グランドハイアット・ホテルに
設置された。

(左)「夢」シリーズ 粉青沙器「頭」
高55.0 幅25.0cm 1992年

およそ60年代の後半から「粉青沙器」、70年代の初めから「青磁」、続いて「白磁」となり、80年代にはそれらの技法を元に申相浩独自の世界を開花させ、その後、「器」という形態を離れ、90年代からは一挙に現代陶芸の造形的世界に転換していく、というのが大まかな展開の道筋となっている。

まず、80年代から発表された陶芸作品を見てみると、「面取り」技法による白磁・青磁がある。ここで注目したいのは、申氏の白磁・青磁はいわゆる高麗青磁や李朝白磁を継承しようとするものではなく、きわめて現代的な造形意識を持って制作されたものということである。

「技術」としては高麗青磁・李朝白磁を意識していても、「表現」としては現代の陶芸を意識しているのである。だから「面取り」という古典的な技法でも、単に器面に変化を持たせるためや、装飾技法のひとつとして使うのではなく、例えば、丸を四角に、球体や円柱を方形に変えてしまうような力強い造形意識を持って使われているわけである。

続いて、韓国陶芸ではあまり見かけない「黒陶」のシリーズがある。鉄釉・天目釉をベースとした作品なので、器面は油滴のような窯変も見られるが、やはりここでも器形（フォルム）に申氏の造形意識が表れている。口辺が波打っていたり、胴体がなだらかな丸みではなく、不定形にゆがんでいるが、全体を見ればゆったりとした大らかさを感じられる。

興味深いことに、80年代の白磁・青磁のシリーズには「我」、黒陶のシリーズには「心」というタイトルがつけられている。つまり、現代的な造形意識による作品であっても、それらは内面的な精神世界の表象である、ということでもある。

そして、90年代に入ると「粉青沙器」の新たな仕事が始まる。粉青沙器とは、「青磁に粉をほどこして装飾した沙器（磁器）」を意味し、歴史的には高麗青磁と李朝白磁の中間に位置するやきものである。技法としては、高麗青磁と同じ胎土に陰刻したり、スタンプを押し（印花）、その上に白土を埋め込んだり（象嵌）、あるいはまた、



(上)「アフリカの夢」シリーズ 高80.0 幅70.0cm 1999年
 (下)「アフリカの夢」シリーズ 高50.0 幅70.0cm 2001年



「アフリカの夢」シリーズ(2005年)が置かれたギャラリー

の頭をイメージさせるオブジェが出てきた。この「Head」シリーズと名づけられたオブジェ陶に続いて、90年代半ばより、作品のスケールがさらに大きくなり、文字通りの「陶の彫刻」となって、ソウル市内のグランドハイアット・ホテルに設置された作品群へと結実していく。

本誌でも紹介された(42号)この「Head」シリーズを初めて見たとき、正直言ってある種のとまどいを覚えた。「頭部」らしき混沌としたフォルムも、地肌を思わせる表面の質感も、あたかも大地から生えてきた土の彫刻のような「原初のかたち」を思わせるのである。数年前に、ホテルのロビーの柱に設置されたこの「Head」

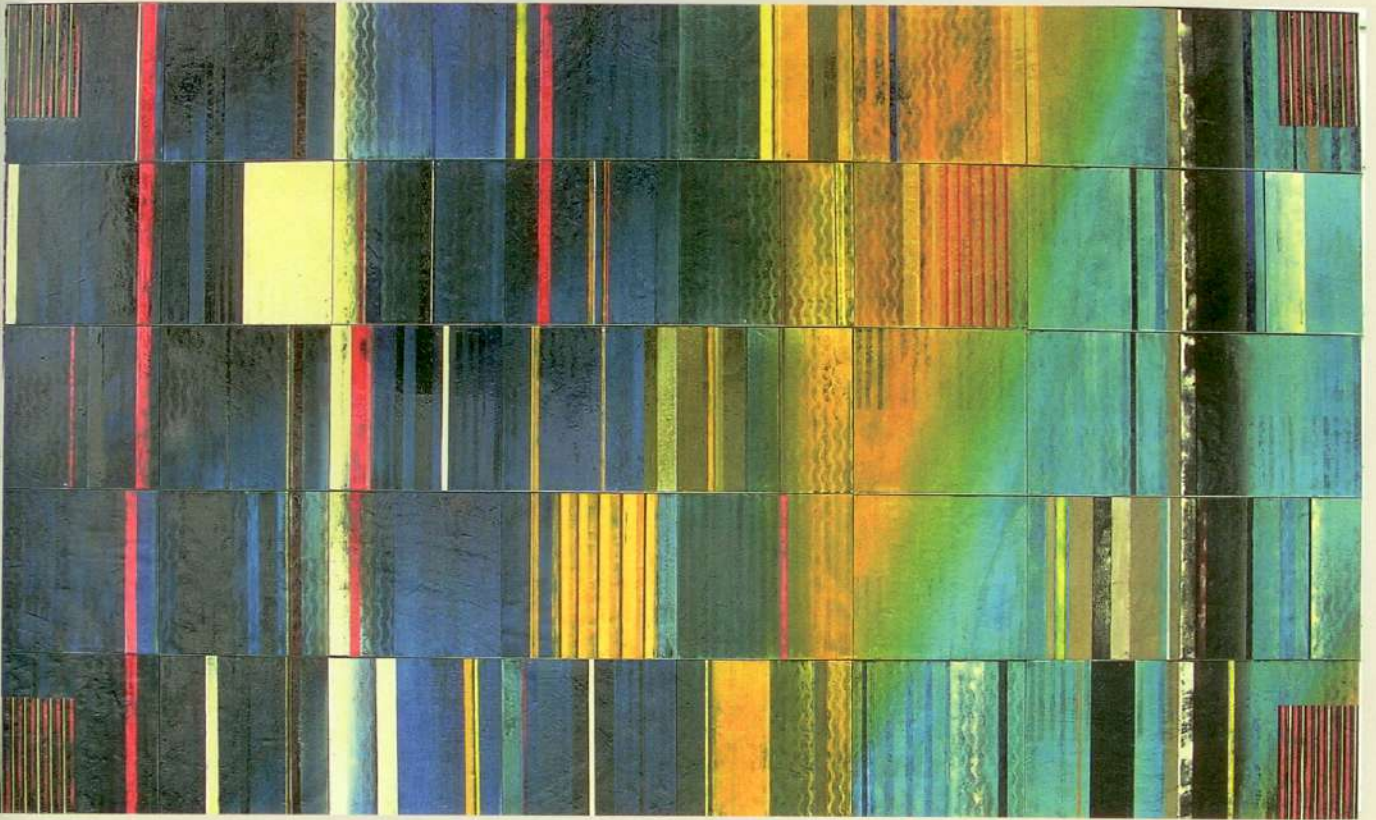


(上)ソウル市のマリオットホテルのエントランス正面に置かれた「アフリカの夢」(2対のうち右)
 (下)マリオットホテルのロビーに置かれた「アフリカの夢」

白化粧土を全面に施し、文様を掻き落したりして、その上に灰青色の釉薬を掛けたものである。日本ではこれを総称して「三島」と呼んでいるが、彫三島、磨手、刷毛目、粉引などの茶碗(茶陶)が珍重されている。

「夢」シリーズと題された申氏の粉青沙器は、実に自由で、のびのびとした現代的な表現に溢れている。技法的には、象嵌や印花技法を使っているが、竹ペラで勢いよく彫られた鳥や魚や植物などの図柄が、「文様」というより「絵画」として器面一杯に踊っている。

そして、そうした粉青沙器の作品の中から、馬や牛のような動物



陶画(ファイアド・ペインティング) 縦250.0 横350.0cm 2007年



(上)ギャラリー棟に展示された陶画、「アフリカの夢」シリーズを見る。
(下)2007年の新作が置かれた中庭。

作品をチラッと見たことがある。夜だったこともあるが、まるで古代の神殿の前に立ったように感じた記憶がある。

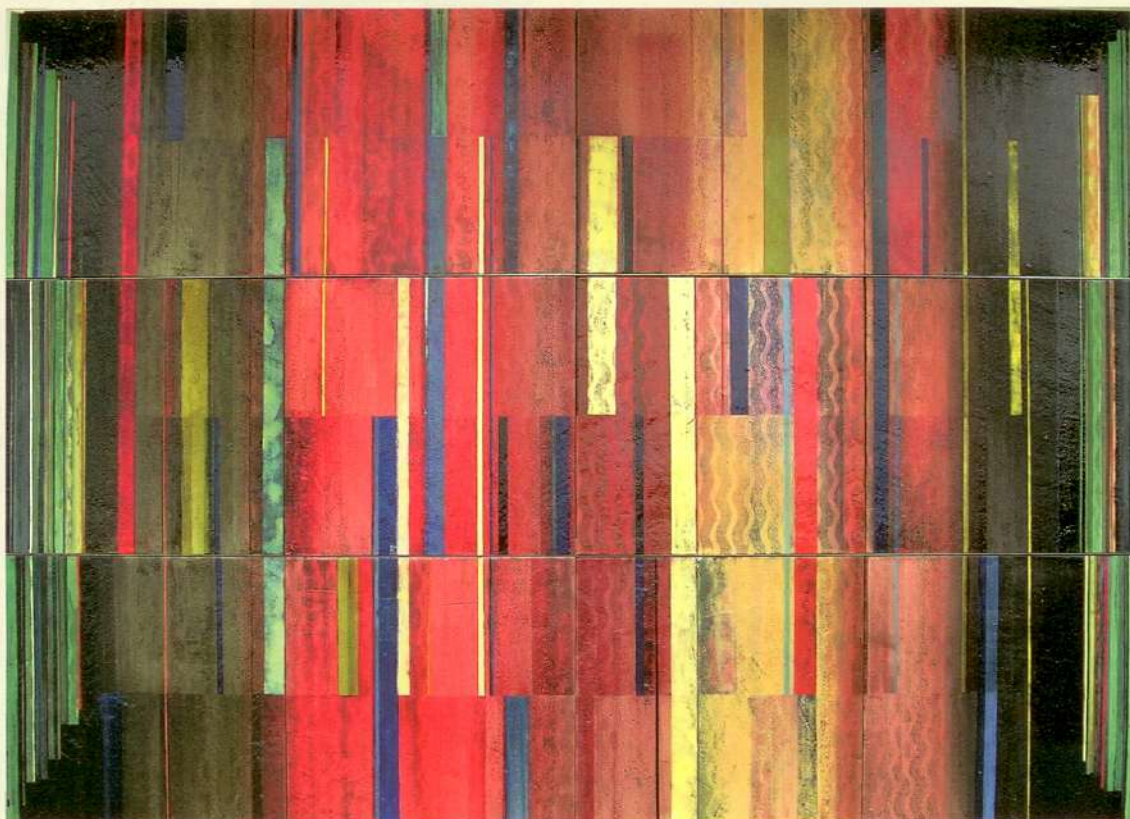
これがさらに発展したものが90年代末から始まった「アフリカの夢」シリーズである。敷地内にあるギャラリー棟や庭のあちこちにも、この「アフリカの夢」シリーズが設置されているが、一体どれだけの数の作品が制作されたのか、とその量に圧倒される。

角のある動物の頭と人間の顔がミックスしたような「頭」、その頭を据えたトータルポールのような「像」、材木で構成されたよう

な「馬」、庭にたむろする「四足獣」たち。まるで「夢」の中に次々と現れては消えるアフリカのファントム(幻像)のようである。

この強力なインパクトを持つ「アフリカの夢」シリーズも、マリオット・ホテルのような場所に置かれると、また別の印象を与える。エントランス正面やロビーのあちこちに「角を持つ頭」像が設置されているが、ホテルなどによくある彫刻や壁面の絵画作品にはない「劇場」的な効果が感じられた。

いずれにせよ、こうした大きなホテルに、次々と「陶芸」の大作



陶画(ファイアド・ペインティング) 縦150.0 横300.0cm 2007年



申相浩 略歴

1947年ソウルに生まれる。65年利川で「申相浩陶芸研究所」設立(18歳)。韓国産業美術展覧会特選(72年まで8回入選)。弘益大学校美術大学卒業。73年個展(MIDOPA Gallery)。78年個展(新世界画廊)。79年ニューヨーク韓国画廊個展。ワシントンD.C.H画廊個展。空間大展大賞。80年個展(三越・日本橋) 82年個展(新世界美術館)。個展(三越・日本橋)。84年アメリカコネチカット州立大学交換教授。個展(コネチカット州立大学美術館)。85年個展(Doang Bang Plaza Gallery)。86年個展(Press Center)。87年天満屋広島店・福山店・岡山店で個展。91(平成3)年個展(朝鮮日報ギャラリー)。95年個展(DONG-A Gallery)。「申相浩の陶芸」展(東京・草月美術館)02。個展「アフリカの夢」(HYUNDAI Gallery)

が置かれているという韓国陶芸界の躍進は、目をみはるものがある。日本でも80年代から、野外での陶のモニュメントや建築物に附属した陶壁の制作が盛んに行われるようになってきているが、韓国ではそれは建築物の「装飾」ではなく、あくまで彫刻のような「アート」であり、「陶芸」であるということなのである。

「アフリカの夢」シリーズ以後の申氏の制作は、最初に述べたように「平面作品」へと向かっている。ギメ・クレイアーク・ミュージアムで初めてこの「陶板」を見たとき、これはあくまで建物の装飾タイルだと思った。ところが今回、申氏のアトリエに掛けられた「陶画」を目にしたとき、申氏が目指していたものは陶による「平面絵画」であることを理解した。

しかし、この「ファイアド・ペインティング(やきもの絵画)」シリーズもいつまで続くのかはわからない。5、6年の間隔で次々と新たなシリーズの制作を始めていく申相浩のペースは、まだまだ衰えそえない。だから次の展開が予想できないのである。

今つくづく、申相浩というアーティストは、韓国陶芸界の「一歩先」を走り続けるランナーであるということを実感している。

(本誌・松山龍雄)